

茂山狂言



内子座公演

令和元年
10月5日(土)

開場 10時30分
第一部 開演 11時00分 (2時間公演)
第二部 開演 14時00分 (2時間公演)



第一部：11:00

(内子子ども狂言くらぶ無料公演)

解説：茂山千三郎

古典：「口真似(くちまね)」

古典：「柑子(こうじ)」

小舞：「土車(つちぐるま)」「神鳴(かみなり)」

古典：「菌(くさびら)」

古典：「しびり」

新作：「かみあそび」

内子の恵みをふんだんにあしらった
スイーツ特別席をご用意!

(第2部中入りにて)



スイーツ特別席
(1階東・西両棟敷)
限定42席!

スイーツは、内子の恵みをふんだんに使用した、内子フレッシュパークからりの誇るスペシャルケーキ&ジェラートのプレートにじゃばらの香る「内子茶」のセットです。

また、内子手しごとの会製作で、内子産の百年杉の赤味だけを使用し、贅沢に作られた器(オリジナル布袋付き)に、鬼胡桃で作られたフォークとスプーン。また、敷物には、天神産紙の大洲和紙を使用。これらは全てお土産にお持ち帰りいただきます。



第二部：14:00 (来場者入れ替えののち、有料公演)

解説：鈴木実

古典：「栗焼(くりやき)」 太郎冠者：茂山千三郎 主人：丸石やすし

(休憩：15分)

トーク：茂山千三郎

古典：「附子(ぶす)」 太郎冠者：茂山千之丞 主人：増田浩紀 次郎冠者：網谷正美

古典：「茶壺(ちゃつぼ)」 すっぱ：丸石やすし 田舎者：鈴木実 目代：茂山千三郎



茂山千三郎



茂山千之丞



網谷正美



丸石やすし



増田浩紀



鈴木実

料金：指定席 3,000円 スイーツ指定席：5,000円 自由席：一般券 2,500円

自由席：子供券(中学生以下) 1,500円 自由席：親子券(一般1名+中学生以下の子供1名) 3,000円

会場：内子座

主催：内子町文化創造事業実行委員会

共催：内子町 内子町教育委員会

後援：愛媛県 愛媛県教育委員会 愛媛新聞社 テレビ愛媛 FM愛媛 ケーブルネットワーク西瀬戸

内子町観光協会 内子町商工会 告知協力：南海放送

助成：(一財)地域創造

◆チケット販売・お問い合わせ

内子町役場 町並・地域振興課

〒791-3392 愛媛県喜多郡内子町内子1515番地
TEL. 0893-44-2118 FAX. 0893-44-2157

※ 環境に配慮した取組の一環として、入場の際、靴を入れるための袋のご持参にご協力ください。

くちまね 口真似

内子子ども狂言くらぶ
主人がもらい物の上等の酒を楽しく飲んでくれる相手を探してこいと太郎冠者に命じました。すると太郎冠者が連れてきたのは、評判の悪い酔狂人でした。主人はなぜ連れて来たかと太郎冠者を叱りますが、仕方がないので男を座敷に通すように命じ、客の前で失敗があつては困ると、太郎冠者に以後自分の言ふとおりに、するとおり振舞つて余計なことはするなと命じます。これを口真似をせよと勘違いした太郎冠者は：

くさびら 菌

内子子ども狂言くらぶ
家に大きな菌(キノコ)が生え、取つても取つてもなくなりないので、男が山伏に祈禱を頼みます。山伏が祈禱を始めるものの、菌はますます増え、山伏や男にいたずらをする。必死になつて祈る山伏を尻目に菌はどんどん増え続け……。切戸や揚幕から次々と現れ、中腰でホイホイ飛び回る菌の姿は異様で、SF的な狂言ともいえましよう。

しびり

内子子ども狂言くらぶ
堺へ使いにいくよう命じられた太郎冠者は、痺れがおこつて歩けないと嘘をつきます。仮病を見抜いた主人は、せっかく伯父から振る舞いによばれたが、病氣ならば連れていけないと言つて、太郎冠者をだまします。さて、太郎冠者がとつた行動とは：

こうじ 柑子

内子子ども狂言くらぶ
主人から預かつた貰いものの「三つ成りの柑子」をうっかり食べってしまった太郎冠者。主人に持つてくるように言われた言い訳とは：
柑子とは、蜜柑の一種で、一本の枝の先に三つの実がくついているのが「三つ成りの柑子」です。「好事門を出でず、悪事千里を行く」の格言や、有名な「鹿ヶ谷事件」が言い訳に使われます。「鹿ヶ谷事件」とは平清盛を中心とする平家・六波羅政権の転覆を計る共同謀議が発覚した事件です。首謀者の三名、藤原成経・平康頼・俊寛僧都が鬼界ヶ島へ流されますが、後に成経・康頼は赦免され、都に戻り、俊寛一人だけが取り残されます。この悲劇は様々な演劇に取り入れられています。

内子書き下ろし新作 かみあそび

内子子ども狂言くらぶ
江戸の都の者と京の都の者が道連れになり、伊予国を内子詣でに向かう。仲良く罵りあいながら互いの都を主張しつつ、内子に着いた二人の男は町の賑わいや名産名物に触れながら、この地に導かれた理由を知ることとなる。創建一〇〇周年に披露した内子オリジナル狂言をこどもたち主体で再演を続けている。

くりやき 栗焼

主人は良い栗を四〇個買ったので、この栗を知人にご馳走しようと思ひ、太郎冠者に焼くように命じます。太郎冠者は台所の囲炉裏で見事な焼き栗にしますが、あまりに良い匂いに、栗に手を出してしまい、結局は全部食べてしまいました。そこで主人にした言い訳とは：
栗を焼く場面を中心に、太郎冠者の一人舞台ともいわれる作品です。扇の使い方や、少しの動作で多数の栗を表現するところなどにご注目いただきたいと思ひます。

ぶす 附子

山一つ向うまで出かける主人は、太郎冠者と次郎冠者に留守番をいっつけます。主人は二人に桶を見せ、この中には附子という毒が入つていて、その方から吹く風にあつたただけで死んでしまうくらいだから、絶対に近づかないようにと言ひ置いて出かれます。しかし、だめだと言われると、やつてみたくなるのが人情。二人は、こわごわ桶に近づき、中を覗き込みます。すると、中身は附子ではなく、おいしいような砂糖だつたのです。二人は我慢できず、つい砂糖を口にしてしまひ、とうとう全部平らげてしまひます。そして、言い訳のために主人秘蔵の掛け軸や、天目茶碗を壊して、大声で泣きながら主人を待ちます。二人は、驚き怒る主人にわけを話すのですが：
一休さんの頓知ばなしとしても登場する有名な狂言です。

ちゃつぽ 茶壺

銘茶を買いに使わされた男が茶を買つた帰り道に酒に酔つ払い、道ばたで酔い潰れて寝てしまひます。そこへ通りかかつたすっぽが男が背負つている茶壺を盗もうとします。目を覚ました男は「自分のものだ」と主張しますが、すっぽも自分のものだと言ひ張ります。言い争つているところへ目代が仲裁に入りますが、二人が同じことを言うのでなかなか裁きがつかず、狂言に出てくる茶は「わび・さび」の茶ではなく、銘柄や産地を当てて金品を競う「鬮茶」であつたようです。また「すっぽ」とは「詐欺師」、目代とは「代官」のことです。

